アイヌの交易ネットワーク

アイヌは北は北海道から南は本州北部にまで及ぶ交易ネットワークを確立しました。13 世紀頃から、北海道のアイヌは交易のために樺太（サハリン）南部と千島列島へ移動しました。彼らは西の方向にはアムール川下流域の共同体と、北東の方向にはカムチャツカ半島との交易を行い、クロテンの毛皮や和人（民族的日本人）の商人から得た漆器や鉄などの品物を、絹、ガラス玉、その他の商品と交換していました。

14 世紀から 15 世紀にかけて、本州からの和人が北海道南部の沿岸部に独自の交易拠点を設立しました。江戸時代（1603-1867）には、蝦夷（現在の北海道）の多くの地域を統治した松前藩が正式な交易所を設置し、アイヌとの交易を管理するようになりました。これらの交易所は、保存されたサケ、毛皮、熊由来の薬などの物資の交換の拠点となりました。松前藩の交易独占は徐々に力関係を変化させ、アイヌは次第に周縁化されていきました。